

公開講演会記録

記念館で交差する引揚げの記憶

「ドイツ人追放」の歴史と出会って

満蒙開拓平和記念館 三沢亜紀



1. 記念館開館の経緯

「今ごろこんなもの作って誰が来るんだ」。

元開拓団のおじいちゃんが放った言葉が忘れられません。記念館建設に向けた活動を展開している最中でした。自分たちが建立した慰霊碑に子どもや孫たちは関心がなく、この先の維持管理に頭を悩ませている状況にあって、記念館など作っても誰も来ないだろう……。その裏側には、戦後の日本社会の中でほとんど顧みられずに生きてきた人々のあきらめと悔しさが滲んでいました。開拓団を全国で最も多く送り出した長野県下伊那。この地域でさえ、満蒙開拓は風化しつつある歴史だったのです。

満蒙開拓平和記念館（以下記念館）は

2013年4月にオープンしました。今年で10年目に入ります。建設母体となったのは飯田日中友好協会。活動の中心は、この地域に帰ってきた中国帰国者の皆さんの生活、仕事、住まいなどの支援や交流事業でした。90年代には帰国者家族の皆さんとバス16台を連ねて名古屋の動物園へバスハイクに行ったという記録も！活発な活動をしていたことがうかがえます。

帰国者の皆さんの生活が少しずつ落ち着く中で、活動は歴史の「継承」にシフトし、語り部の会の発足や体験の聞き取りといった取り組みが進められていきます。ところが、背景にあった満蒙開拓の実態を調査しようにも、日本中どこにも記念館・資料館の類いはありません。体験者が少なくなる危機感もあり、今こそ

この歴史を残す拠点を作らなければならないとの決意で、2006年に建設に向けた活動が開始されました。開館までの足掛け8年の期間にはリーマンショックや東日本大震災などがあり、関係団体の開拓自興会もすでに解散。支援団体がほとんどない中で民間寄付だけではどうしても資金が足りず、各方面からのご協力を得てようやく行政からの助成金が叶い、記念館建設が実現しました。

事業計画ではどう見積もっても年間来館者数5000人でした。あまり知られていない歴史テーマであり、しかもアクセスの悪い立地。職員2人でのんびりと来館者とお茶でも飲んで……。実はそんなイメージをしていました。ところが。開館以来たいへんな反響で、押し寄せる

お客様と鳴り続ける電話に数カ月忙殺されました。パンフレットはない、看板もない、団体予約の受付方法なども後手後手。満蒙開拓という歴史を伝えようという市民活動から、自覚も準備もないまま一気にお客様商売もしなければならなくなったのです。何もかもが手探りで歩み続けて丸9年。来館者は20万人を超えました。



満蒙開拓平和記念館外観

と言って引揚げ体験を語る人。記念館は広島や沖縄といった「現場」ではありませんが、体験者にとっては記憶を蘇らせる場であり、心の奥に閉じ込めていた感情を吐露する場であり、亡くした人に思いを馳せる慰霊の場ともなっています。

中には、親が満鉄で働いていた、祖父が関東軍の兵隊だった、などという人たちも。一つ、エピソードをご紹介します。

ハルビン市内にあった桃山小学校の同窓会の方々から来館のご予約がありました。できれば当時のハルビンを知りたいとのご要望でした。桃山小学校といえば、開拓団にとってみると敗戦後の避難民収容所です。当日は、そこで越冬した青少年義勇軍の語り部Yさんに来ていただきました。極寒の収容所生活の中で、Yさんの仲間たちも大勢亡くなっています。一方、桃山小学校に通っていた子どもたちは、親から「病気がうつるから学校へ行ってはいけない」と諭さ

れていたそうです。同じ日本人として何かできなかったのだろうか、同窓会の幹事さんはずっと引っ掛かっていたそうです。最後に彼は「私たちのような日本人を、Yさんはどう思っていますか」と尋ねました。Yさんはじっと考えてから「日本へ帰りたいという思いは、同じだったと思います」と静かに答えました。来館者それぞれの満州体験が、満州を立体的に浮き上がらせていきます。

◇モノ

「満州」「満蒙開拓」をテーマにした記念館は他になかったため、開館後はたくさん資料の寄贈がありました。データベースにするため、日夜インプットや分類作業をしています。日常業務の中心は来館者対応のため追いつかない状況です。寄贈者は延べ1500人にのぼり、資料点数は把握しきれません。昨年ようやく、戦後出版された書籍を中心に約2000冊を図書ルームに配架することができました。

寄贈品の中には当時の貴重な資料もあります。開拓団は引揚げ時、ほぼ着の身着のままであったため写真1枚持ち帰ることができなかったという人がほとんどなのですが、それでも、終戦前に内地の

2. 記念館で行き交う人・モノ・情報

◇人

開館当初に詰めかけてくださった体験者の方々の姿は忘れられません。満州の地図の前に立ち尽くして涙する人。開拓団名簿に同級生の名前を見つけて手を合わせる人。電話口で「初めて他人に話す」

親戚に送ってあった写真や手紙、引揚げ時の書類などが集まってきました。特に、体験談は冊子や書籍になっているものから、広告の裏に書かれているものまで数多く寄せられました。それぞれの資料に、一人ひとりの生きた証が残されています。

◇情報

最近多いのは、親世代の満州での足跡を辿る人たちの来館や問い合わせです。直接は話してくれなかった、あるいは聴こうとしなかった、もっと聴いておけばよかった、という次の世代の人たちです。中国帰国者家族も時々来館されます。なぜ、日本に帰ってきたのか、そもそもなぜ日本にルーツがあったのかも知らないまま帰国した2、3世の人たちの中には、ここに来て初めて家族が辿った歴史の背景を知るといふ人たちもいます。困難を乗り越えてきた家族に誇りを持つことができたと言って帰っていった若い女性もいました。

満州についてのさまざまな質問や問い合わせもあります。〇〇県から行った開拓団の入植場所について。引揚者名簿のこと。満州国時代の医療や教育について。教科書会社からは資料利用の依頼。当時の公的な資料がそろっているわけではなく、

研究者でもない私たちですが、収蔵資料を調べ精一杯の対応をしています。でも、いつも思うのは、本来であれば公的な専門機関を設け、資料の収集や管理、研究情報提供などをするべきだったのではないかとということです。体験者が少なくなる中で、私たちの記念館がこれから担っていく役割と社会からの期待はさらに大きくなっていくのだらうと思います。

3. ドイツの人たちとの出会い

◇ドイツへ導かれて

そんなプラットホームのような記念館ではさまざまな人が行き交い、つながっていき、奇跡を起こすこともあります。

2017年、ドイツ在住の日本人女性フックス真理子さんからメールが届きました。「被追放者女性同盟」という団体から日本の満蒙開拓団のことについて講演を頼まれているとのこと。ドイツの引揚者団体であるそのおばあちゃんたちは、今でも頻繁に学習会を開催し、さらにその学習会には国からの支援があるというのです。そのいかつい名前の組織は一体何だろう。そこから「ドイツ人追放」の歴史を辿ることになります。

翌2018年、祖父母がドイツ系で終

戦時にポーランドからドイツへ引揚げてきた経験を持つ上智大学の木村護郎クリストフ先生を講座にお呼びし、満蒙開拓と「ドイツ人追放」の歴史の共通点や違いについてお話しいただきました。ドイツにもソ連軍の侵攻、敗戦とともに占領地などから逃げ戻らなければならなかった人々がいました。その数、1200万人。「引揚げ」ではなく「追放」という言葉に、終戦時にドイツ民族に向けられた容赦ない報復の厳しさが伝わってきます。ソ連軍の侵攻で逃避行を余儀なくされ、ナチスドイツに恨みを持つ現地住民からの暴力的な「追放」に遭った人々の姿は、満州の日本人そのものでした。さかのばれば、軍事力で領土を拡大し、実効支配として自国民を入植させていく帝国主義的占領政策から共通しているといえます。一方、戦後の近隣諸国との対話を重ねた和解や、国としての負の歴史への向き合い方については皆さんもご存知のとおりですが、あまり知られていないのは、ドイツも時間が経ったということとです。多面的な歴史観と自国の過ちを認める強さを持って対話の努力をしてきたドイツとポーランド。その歩みは、日本の私たちへ示唆を与えてくれるものであり、記念館は対話の場という大切な使

命と可能性があることを気づかされる講座でした。

ちょうどその頃、いつか行きたいと思っていたポーランドのアウシュビッツ博物館で唯一の日本人ガイドとして活躍する中谷剛さんが、来日に合わせてわざわざ記念館へ来てくださいました。これを機に、ヨーロッパ研修旅行を決断。アウシュビッツとあわせて、フックス真理子さんのお誘いでドイツにも行き、そこで「被追放者女性同盟」の方々と交流する時間を持つこととなりました。

◇「ドイツ人追放」とは

舞台はボンにある国立歴史博物館。こちらは戦後のドイツの歩みを辿る現代史の博物館ですが、1階のエントランスの正面に、まずはホロコーストの展示がありました。ドイツの現代史はホロコーストが起点となるという歴史観が表現されていたのだと思います。展示は、東西に分かれたそれぞれの歩みから、ベルリンの壁の崩壊、近年の移民受け入れ問題まで。当時のメルケル首相を揶揄するような展示もあり、国立博物館でありながら言論、表現の自由と独立性が保たれていることに感心させられました。

この博物館で2005〜2006年に

「追放と統合」という「ドイツ人追放」の歴史をテーマにした特別展が開催されました。有名なブランド首相の時代以降、ドイツは自国の加害の歴史に向き合う姿勢をナショナルアイデンティティとして確立してきました。そんな中で、追放者の歴史、その被害性をどう扱うのかはいへん難しい問題だったようです。ただ、ドイツの中でも近年あまり触れられなかった歴史ということで、多くの若い世代にとっては初めて出会う歴史であり、展示の内容も、その総括というよりもまずはその史実を伝えるというスタンスだったようです。

ここで改めて「ドイツ人追放」の歴史をみておきます。ドイツの敗戦とともに、周辺国に住んでいたドイツ人はドイツへ「追放」されます。追放の中身を大別すると、①ソ連軍からの避難、②暴力的な追放、③ポツダム協定による秩序ある強制移住です。③においても移送を待つ間は終戦後の満州と同様、暴力を受けたり、悲惨な収容所生活で大勢の犠牲者が出たそうです。

では、どこからの追放だったのか。ヨーロッパの場合、何世紀にもわたりいろいろな民族が入り交じって住んでおり、ドイツ系の人々もポーランド、チェコ、ハンガ

リー、ルーマニアなど各地でそれぞれにドイツの文化を大切に生活していました。ところが、ドイツ敗戦とともに、先祖代々生きてきた土地を離れなければならないことに。さらに、ポーランドの国土が西側へ移動したため、戦前までドイツ領であった東部地域がポーランド領になり、そこから追われた人が約700万人と圧倒的多数を占めます。ナチス時代の占領地を追われただけでなく、先祖代々住んでいた自分の土地を追いやられた経験を持つ人たちは戦後、強烈な「被害体験」としての記憶を持ち続けました。「追放者」の背景はたいへん複雑といえます。

◇「被追放者女性同盟」とは

見学を終え、いよいよ交流会のスタート。昼食をはさんで4時間に及ぶ濃厚な時間でした。

コーディネーターのフックス真理子さんとお仲間が通訳をしてくださり、ドイツから4名と私たちのあわせて20人ほど。

初めに立ち上がって挨拶したのは、女性同盟会長のマリア・ヴェアタンさん、元教師。1981年にルーマニアから帰還した「後期帰還者」と呼ばれるカテゴリーに属します。あのチャウシェスク独

裁政権下においてはドイツ語を禁止された時もあったといえます。ちなみに「後期帰還者」の多くは東欧各国が民主化された後にドイツへ帰ってきた人たちです。終戦後もとり残されていたり、移住を強要されなかったり、逆に労働力として留め置かれ移住を遮られるなど、さまざまな形で国外に残っていたドイツ人は約400万人いたといわれています。

彼女の話をまとめてみます。

●満州からの引揚者と自分たちは、国策であったことと加害者であり被害者であるという共通点がある。

●同盟の女性たちは隣国の人々とお互いの体験を話し合うことで理解を深める努力をしてきた。

●私たちの文化の中でその経験が還元Ⅱ生かされることが大切。

続いて同じく同盟の幹部であるヘルガ・エングスフーバーさん、元検事長。1945年にチェコスロヴァキアから弟たちと一緒に悲惨な逃避行の末に帰還した人です。彼女がはじめに述べたことは、ドイツが戦後、国としてナチスドイツが犯した罪に（ゆっくりとではあったが）向き合い、教育の場でも伝えていることに誇りを持っている、ということでした。

実は、西ドイツにおいて被追放者で構

成する諸団体は戦後、自らの故郷を取り戻す運動を展開します。旧東部領問題・国境問題、つまり戦後ポーランド領になった元ドイツ領の返還を主張。ポツダム会談で決められたオーデル・ナイセ線を国境にするわけにはいきません。全人口の20%近くに及ぶ被追放者は当然選挙では大票田であり、政治的にも発言力がありました。戦争被害者であり、ソ連によって故地を奪われた「共産主義の被害者」でもあった彼らは、ポーランドとの和解においては、いわば抵抗勢力であったわけですが。しかし、東ドイツとポーランドは1950年に国交を樹立し、国境は既成事実化していきます。50年代以降は西ドイツも東方外交を進め、被追放者団体の主張は国際社会の動きと逆行。世代交代もあって、少数派となった一部の勢力は右派政党と結びつくといった流れになったそうです。

その後、彼女たちはどのような道を通ったのか。その答えがマリアさん、ヘルガさんの挨拶にありました。対話による和解は、お互いの痛みを乗り越える力になったことでしょう。学び合いは自国の加害に向き合う力に。さらに、自分たちの体験を社会にどう生かすのかという発想にまで到達しています。フックス真理子さ

んが講師に招かれたように、彼女たちは今でも食欲に学び合い、その成果を出版物として発信し、記録しています。加害の歴史に向き合い確立したドイツのアイデンティティを、彼女たちも彼女たちの歴史を乗り越えながら体得していったのだと思います。

とにかく、堂々と語る彼女たちの姿は圧倒的でした。もちろん、それぞれ被害体験も語っていただきましたが、果たして、日本の引揚者たちが、中でも女性たちが、自らの体験を通して自国の歴史に言及したり、その体験を社会に「還元する」といった発想を持つことができたのか。インテリ層である彼女たちとて、ドイツであれ、引揚者・帰還者の辛酸は十分舐めてきたはず。でもそれを乗り越える力の源泉には学ぶ場があり、対話があり、さらに議論があったからではないか、そしてそのような機会が残念ながら日本の引揚者の中にはなかったのではないかなと思うのです。

前述したように、日本の引揚者たちは口を閉ざし、日本社会は「満州」に蓋をしてきました。彼らは傷を癒す場もなく、歴史を客観視する機会もなく、他者との対話によって乗り越え得る痛みも痛みのまま抱えています。近年ようやく地域社

会の中で語る機会ができてきたとはいえ、それは体験談にとどまり、それを踏まえた社会的発言をしている人はほとんど見当たりません。私たちの社会は結局、その人たちの体験を生かすことができないまま、近隣諸国との対話も進まないまま、今に至っているといえます。

こうして、刺激的な交流会はほぼドイツ側の人たちの発言に終始し、私たち日本側はただ圧倒されて終わったに等しかったのですが、それでも、当事者との交流という貴重な時間を得、ドイツの人々に多いに学び、別れを惜しんだのでした。まさか、続きがあるとは思いません。

4. 記念館セミナー棟竣工記念シンポジウム「日本とドイツの引揚者・帰国者の戦後」

2019年10月19日。記念館は別館セミナー棟竣工式を迎えました。椅子席で



ドイツの人たちを招いて開催したシンポジウム

あれば1000人は収容できるセミナールームが完成したのです。その記念シンポジウム、ドイツから「被追放者女性同盟」の方々をお招きしました。お招きしたといっても、実際は彼女たちから来日を希望され、特に84歳になるヘルガさんが積極的だったそうです。フックス真理子さんのアテンドで、ドイツからはマリアさん、ヘルガさん、もう一人、後期帰還者のローゼマリーさんが来日。コーディネーター役を木村護郎クリストフ先生にお願いすることができ、日本側からは、祖母が中国残留婦人である長崎大学准教授の南誠先生にパネリストに加わっていただきました。

当日は県内外から1000人が聴講に詰めかけ、彼女たちにはより具体的な自らの体験を語っていただきました。敗戦時の凄惨な逃避行、現地住民からの襲撃、戦後祖国へ帰ってきてからの周りの人々との軋轢などは、私たちが聴いてきた満

州からの引揚げ体験と重なるものでした。さらに、戦後も周辺国に残った人々が受けた迫害や将来への不安、帰国後に受けた差別にも、中国残留邦人と共通するものがありました。

一方、被追放者へのさまざまな法的支援と、それによって社会に包摂されていったドイツの過程は、実社会での経済的格差などはあったものの、日本との違いを感じました。

さらに話は現代の難民問題へ。1200万人もの「被追放者」を受け入れながらも復興を遂げ、先進国として国際社会から認められてきたドイツ。戦時中は何数のユダヤ人がアメリカなど国外へ亡命したという歴史があります。さらに、ベルリンの壁崩壊後には東欧からも多くの人々を受け入れました。こうしたドイツの歴史は、人々の亡命権を保障すべきという考えを生み出しました。一方で、当時問題になっていたのは経済的難民の受入れで、メルケル政権は積極的な政策を打ち出していました。世論は揺れており、被追放者の人々は自らの経験を相対化し、亡命者と難民の違いや包摂の難しさなどの議論を展開していました。

まさにこれが、自分たちの経験を社会に「還元する」ということなのでしょう。

過去の体験を今の社会や政策に反映させるということなのだと思います。歴史を現在や未来に生かす。ドイツ社会の力強さを見せつけられる思いでした。

ドイツ語と日本語が飛び交う熱気に満ちたシンポジウムをいよいよ閉じようとした時、最前列で聴講していた元開拓団の一人が立ち上がり、ヘルガさんのもとに歩み寄って手を取るという思いがけないことが起こりました。するとヘルガさんも立ち上がり、開拓団の皆さんのもとへ。会場は大きな拍手と温かい笑顔に包まれました。

東アジアとヨーロッパの遠く離れたところで同じ時代に同じような体験をした人たち。大切な人を失い、戦後も苦難を乗り越えてきた人たちが手を取り合い、お互いをいたわり、ねぎらう。時空を越えて記憶が交差する奇跡のような瞬間。心ふるえるエンディングでした。

5. 対話と学びの先に

「ドイツ人追放」の歴史に出会い、ヨーロッパの歴史と相対化することで満蒙開拓がより鮮やかに見えてきたように思います。何よりも、記念館を拠点につながった人の縁で、ドイツの人たちとこのような

交流ができたことは信じ難い成果でした。彼女たちの戦後の歩みは、これから私たちがやるべきことを示唆してくれています。

お互いの体験を語り合い聴き合う対話、他者の体験に耳を傾けようとする力が導いた隣国の人々との和解、そしてこの歴史について、ときには議論を交わし学び続けることが社会を創る力、加害の歴史を乗り越える力につながっていくということを、被追放者女性同盟の方々に教わりました。

新型コロナウイルス感染拡大により記念館も大きな打撃を受けておりますが、逆に小中学校の修学旅行の来館は増えており、これからの課題である次世代への継承は思わぬ形で前進しています。子どもたちは軽々と国境を越え、民族を越え、さまざまな立場に立って考えます。その垣根のない想像力に希望を感じます。

これから私たちは、多くの人たちとつながりながら学び続けていきたいと思



ヘルガさんと元開拓団員

います。

*オンライン講演会の要旨を
とのご依頼でしたが、少し内
容を変更いたしましたこと、
ご了承ください。

参考文献

●川喜田敦子『東欧からのド
イツ人の「追放」二〇世紀
の住民移動の歴史のなかで』
（白水社、2019年）

●佐藤成基「忘れられた領土―
東方領土問題と戦後ドイツの
ナショナル・アイデンティテ
ィー」（茨城大学人文学部紀
要No.37、2002年）

（2022年2月17日・オンライン講演
会）

筆者略歴（みさわ あき）

1967年（昭和42年）広島県因島市
（現尾道市）生まれ。大学生活と会社
員生活のあわせて8年間を東京で過
したのち長野県飯田市へ移住。飯田ケー
ブルテレビで15年間番組制作にたずさ
わり、2009年12月より満蒙開拓平
和記念館事業準備会の事務局員となる。
現在、満蒙開拓平和記念館事務局長。